繪本高麗嶽 上

155
617

74

余一日紅翠斎北尾翁を訪ふ書を品し画
を論して日西に傾んとする時に書肆
廣山堂一稿本を携来りて予に示す於ハ
是先生嘗て作る所の名馬の図なり久
しく匣底に在て刊行せず此様の美
玉遂に埋没せん事を惜ミ上梓して
世に公せんと欲す翁者を悦然として
回顧す昔の所の原より是を済ふ此篇を
今を去事十数年前両未閑伎倆
陽に筆を採て紙上に塗抹し以て一局の

奕棋に充るものはいふんの梨棗に災して章
布に余か拙きを余んや若回否倍観乃手者ま
當局の者ハ拙を異して特に先生局に為れ之
衆人皆傍に観ゆ小生も一個傍観の人也
小すら仍をも推て四方傍観の人乃心を察するに
誰かあれを高手段に非といんや切に乞
ふ章不歌いね只得くされを許し余に
託してを題言を贈りしも余別に意を構一寸
直にいあと層山生か應接の話を取て之夾
書了至て筆を閣するか時月皓潔にあ

風凄涼きあ帰路験了して寒を怯るゝ
層山生を拉して帰る

享和二年壬戌春日

神田　五郎作撰

友人　叔義録

八龍
絶地 翻羽 奔霄
越影 踰輝
超光 騰霧
挾翼
周穆
王卅馬
を乗車に付く天下縦
徧巡行す其妙ハ高山
大河をゆくこと平地のごとし

驄龍
源満仲朝臣神勅によんて一疋の

龍馬とゆるして挑み乗て多田乃池にて九頭の竜を射てたいらぐる馬中の兄なりとてそうりうと号しられしとぞ

赤兎馬

関羽がのる馬にして
はじめハ呂布が
のりしが布ころ
されて後
曹操が手
にありしが
関羽が
降参の
せんとて
おくりし
又関羽ハ
此馬
にて
一夜
千里
はしる
とあり

源太黒

八幡太郎義家の馬なり義家元服のとき禁庭より下し給ふそのとき奥州より奉れる之眉中に白き毛ありよつて源太白とも号せしとなりと

一名白浪
畠山庄司次郎重忠
が馬をかり
鵯ごえの軍
功ふ出るそ
利あり一谷
ひよどり越
と嶮とらえ
八公ろ深
くいさえり
まえ自分て
馬乃おゑ
肩ふかけて
脊
負
嶮路をくだれ

白兎
細川清氏が
馬より
戦場
勝利す
清氏

騅(すい)

楚項王(そかうわう)の馬なり漢(かん)と楚(そ)七十余(よ)度(ど)のたゝかひに項(かう)羽(う)これにのりて世をおほふのいきほひ(?)勇(ゆう)をあらはせしも天運(てんうん)つきて烏江(うかう)にをいて(?)はんとするところを押(?)とゞめて烏江(うかう)の亭(てい)長(ちやう)[illegible]

[illegible]